人嫌いですから

ただの行商人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人嫌いですから

【Ｎコード】
Ｎ２７６９Ｒ

【作者名】
ただの行商人

【あらすじ】
その少女は昔から、全く身に覚えのない記憶を持っていた。その記憶は夢の中に、おぼろげながらも時々現れる。やがて、それは前世の自分のものであると知った。同時に不思議な力を得る。なぜ自分だけがこんな記憶を持っているのか。得た力は何のためか。時と共に徐々に鮮明になってくる自分の記憶に困惑しつつ、少女はある日、旅に出ることに決める。ただ、絶世の美少女と謳われた少女には一つだけ問題があった。彼女は極度の人嫌いだったのだ。

プロローグ（前書き）

どうも、ただの行商人と申します～

プロローグ

「お嬢ちゃん、旅人かい」
「ええ、まあ」
「その年で旅とは珍しいね」
「人嫌いでして」
「そいつは残念だね。お嬢ちゃんくらいのべっぴんさんなら、言い寄ってくる男もわんさかいるだろうに」
「興味ないんです。いいから早く船を出して下さい」

男は苦笑いすると船を出した。
そんな男を、少女は興味なさそうに見る。

「しかしまぁ… 人嫌いなのに何で町なんかに行くんだい？」
「聞きたいですか？」

少女の壮絶な笑みに気押されて、男は冷や汗をかいた。その笑みからははっきりと拒絶の意志が含まれている。人嫌いと言うくらいだ。きっと男と話すのも嫌なのだろう。

しばらくの間、お互い無言のまま時が過ぎた。

「……着いたぞ」

男はそう言うと、代金を受け取る。
少女は男の方に顔を向けることすらせずに船から降り、スタスタと歩きだした。

「…最後にひとついいかい？」

男の声で、一瞬足を止める。
「お嬢ちゃん……いくつだ？」
「１５ですけど」
少女の答えに、男は驚きを露わにした。大人っぽい仕草や態度から、２０歳くらいかと思っていたからだ。違和感を感じたから聞いてみたものの、未だに少女の答えは信じられない。
驚く男には目もくれず、少女は再び歩き出した。
漆黒の髪が風になびく様は、幻想のように美しかった。

賑やかな町だ。
どんな名前の町だったか覚えてないし、興味もないのだが、鳴り響く楽器の音はやかましくて腹が立った。
別に音楽が嫌いなわけではない。どちらかというと好きな方だ。ただ、それを奏でているのが人だというのが気に入らない。
「ローゼル公爵のお通りだー！」
一際大きな声が響いた。
振り向くと、豪華な馬車がゆっくり近づいてくる。
その馬車は少女の手前まで来ると止まり、中から使いの者と思われる人間が出てきた。

「む……女か」

その人物は、少女の美しさに一瞬目を奪われるものの、事務的な口調で命令した。

「そこをどけ。公爵様のお通りだ」

「……」

「おい、聞いているのか！」「よい。下がりなさい」

嘆美な声と共に、一人の青年が馬車の中から現れた。その顔立ちは、世の全て女性を虜にすると思わせるほど美しい。

町中に女性達の悲鳴が響いた。

「君のような美しい女性までもが僕の到着を待っていたかと思うと嬉しいよ」

そう言って少女の手を取ろうとする。

少女はその手を勢いよく払った。

街中が静まり返る。

青年は何が起きたかわからないというような顔をした。今まで女性に手を払われた経験などないためだろう。

「触らないで下さい」

「なっ……」

「私はあなたを知りませんし、知りたくもありません」

その瞬間、何人もの護衛兵が少女を取り囲んだ。

先ほどの男が一歩前へ出る。

「貴様、誰に向かって口を聞いてるかわかっているのか？」
「……」
「少し一緒に来て貰おう」

そう言って少女の手を掴んだ時だった。
男の体が突然浮き上がり、激しい音と共に数十メートル先に吹き飛んでいった。
続いて護衛兵達の剣、盾、鎧が分解され、みるみる粒子状になっていく。

「「ひいいいっ！」」

その光景を見た人全員が、悲鳴を上げて逃げ出した。

少女は、再び興味がなさそうに歩きだした。

◆◇◆◇◆

「すみません。この宿に、スイ・ミランという方はいらっしゃいますか？」
「おう、いるぜ！　何だ、お嬢ちゃんはアイツのファンか？」
「ええ…まあ」
「か～　いいね、勇者様ってのは！　こんなかわいい嬢ちゃんにまでモテモテだもんな！」
「……」
「いいぜ、教えてやるよ。本当はいけねぇんだが、嬢ちゃんはかわいいからサービスだ。２０９号室に行ってみな。嬢ちゃんなら、きっと喜んで迎えてくれるはずだぜ」
「ありがとうございます」

宿屋の主人の言うとおり、２０９号室へ向かった。

◆◇◆◇◆

ノックするとドアが開いた。
中からがっちりした体格の男が現れる。

「む…何者だ？」
「勇者のスイ・ミラン様ですか？　私、ファンの者です！」
少女が先程とは別人のような笑顔で話しかけた。
その笑顔はまるでヒマワリのように明るく、同時にバラのような妖艶さを持っている。

スイと呼ばれた勇者は、あっと言う間に少女の笑顔に引き込まれた。

「ちょっとお話したいことがあるんですけど、いいですか？」
「…ああ、構わない」

スイは少女の体をなめ回すように見ると、部屋に入れて鍵をかけた。
目が序々に赤みを帯び、呼吸が激しくなる。

「実はお願いがあるんです」
「あ、ああ　なんだい？」

期待したように、いやらしい笑いを浮かべた。
少女はそれに、この世のものとは思えないほど、美しい笑顔で答える。

「死んで下さい」

そのまま、手をスイへ伸ばした。

◆◇◆◇◆

その日、一人の勇者が帰らぬ人となった。

背中はパックリと割れ、中の臓器は原型がわからないほどメチャメチャだったという。

聞いた話によると、今までいくつもの死体を見てきた検死医が、その場で嘔吐したとか。

宿屋の主人は、別に怪しい者は来なかったと証言し、事件は謎に包まれた。

プロローグ（後書き）

こちらの更新はゆっくりになると思います～

1話　人嫌いの少女（前書き）

とても短いです。

主人公視点になります。

1話　人嫌いの少女

この世界には勇者という最悪な職業の生き物がいる。
奴等は、何の罪もない魔物を虐殺し、正義を語ることで自己満足する。
そればかりか、死んだ魔物の爪や牙、奴等曰く「素材」を剥ぎ取り、意気揚々と帰っていく。

一体人間の法律とやらに当てはめたらいくつの罪に問われるのだろうか。

それにも関わらず、彼らは罪に問われるどころか、むしろ「英雄」とか呼ばれてチヤホヤされている。さらに、現在では「くろーん」とか言って「牛や豚の良素材を保存する」という研究が進められている。全く冗談ではない。何様のつもりだろうか。人間というのは最低の生き物だ。

この前は、人間に住処を追われた魔物が、子供のために餌を探そうと森に入ったら、その場にいた勇者に射殺された。
その勇者はインタビューに対して「村に降りてきたら危険だと思った」とかほざいていやがる。国も国で、そいつに感謝状とか贈ってるし、とにかく最悪だ。

残された子供達はどうなる？
まだお母さんに甘えたかったかも知れない。
いっぱい甘えて、いっぱい会話して、時には怒られながらも、そこから多くのもの得て成長していくのだ。
お母さんもお母さんで、子育てに嫌気がさしながらも、救われているのは自分の方だとやがて気付くのだ。

そうしてお互いに支え合いながら暮らし、いつかお父さんに出会って「大きくなったな」と頭を撫でて貰うのだ。

……あ、涙出てきた

そんな温かい彼らの未来を、その勇者は壊した。
それどころか、「勇者の品格」とかいうタイトルで本まで出版しやがった。
なにが『大ベストセラー！』だ、ふざけるな！
反省のカケラもないではないか。

他の人間も単純で、それからというもの、「勇者」という職業は大人気になった。

「お前、どこの高校行くの？」
「ん、俺か？　『勇者育成専門高等学校』」
「マジで！？　お前、あそこ受かったのかよ！」
「まあ～　倍率は高かったんだけどね～　合格しちまった。ハッハッハ！」
「スゲェな！　今日は俺が奢るから、何かあったら助けてくれよ！」
「いいぜ！　俺に任せろ！！」

「タナカさん、どこの大学なんですか？」
「ああ、僕？　僕は『勇者大学』に通ってるんだ」
「キャ～！！　ステキ～！！　あの『勇大』の生徒さんなんですか！？」
「ああ、あのP教授にも、目をつけて貰っている、曰ばエリートかな（フッ）」
「私、憧れちゃいますぅぅ～～～　お付き合いして貰えませんか？」
「ああ、いいよ（チュッ）」
「キャー／／／／／／／」

などという会話が、至るところで行われている。
大体、そのネーミングセンスは何とかならないのだろうか？

勇者育成専門高等学校？
勇者大学？　勇大？

……ぷっ

最悪だ
何もかも最低だ

『俺が奢る』だと？

そんなゴミクズに何を奢る必要がある。

『曰ばエリートかな（フッ）』だと？

フッ！！！！

人嫌いです。

ホントに嫌いです。

そんなワケで、私は旅をしています。

2話　XX年X月（前書き）

今回も短いです…

しかもくどいです。

ゴメンナサイー

2話　XX年X月

XX年X月、ウチュウの中のチキュウの中のニホンの中のトウキョウに住む夫婦の間に、一人の女の子が誕生。
ヒトミと名付けられる。
生まれた時の第一声は「オギャー」というより「ウリャー」だったらしい。

XX年X月、「なんとかホイクエン」に入園。名前は覚えていない。
「ヒトミちゃんは何が好きなの？」という保育師さんの問いに対し、元気よく「まもの！」と答え、心配になった両親によって病院に連れて行かれる。
ちなみに、「健康体です」という診察を受け、両親は複雑そうな顔をした。

XX年X月、知らないオジサンに声をかけられる。
「お菓子あるよ～」という何の捻りもない誘い文句を「おかし好き！　オジサン嫌い！」という必殺の言葉で迎撃。
オジサンはその場に泣き崩れた。

XX年X月、「なんとかショウガッコウ」に入学。名前は覚えていない。

XX年X月、初めての告白を受ける。
「す、好き！！！」と言って真っ赤になる少年を、「き、嫌い！！！」と一刀両断。
少年はその場に泣き崩れた。

XX年X月、ヒトミの笑顔に欲情した男性教員によって痴漢を受け

る。
彼は、泣き叫ぶヒトミを見て罪悪感に襲われ、自ら自首。
以降、世間から「ロリコン教師」と馬鹿にされるようになる。

ＸＸ年Ｘ月、才能が開花する。

ＸＸ年Ｘ月、独学で「とーいっく」満点を達成。

ＸＸ年Ｘ月、５ヶ国語をマスター。
「神童」と呼ばれる。

ＸＸ年Ｘ月、「数学おりんぴっく」国内優勝。

ＸＸ年Ｘ月、貰ったラブレターの数が１００を突破。
ちなみに全てごみ箱行き。

ＸＸ年Ｘ月、「なんとかチュウガッコウ」に入学。名前は覚えていない。

ＸＸ年Ｘ月、人気が爆発。
称号「マドンナ」を獲得。
先輩も含めて猛烈な熱愛行動を受ける。
高校の人間まで学校に押し寄せるようになる。
ウンザリして柔道部へ入部。

ＸＸ年Ｘ月、柔道女子〇〇級全国優勝。
テレビ局からのインタビューを受ける。

ＸＸ年Ｘ月、テレビ放送によってファンが急増。
ストーカーが現れるようになる。

ちなみに全員一本背負いで撃破。

ＸＸ年Ｘ月、嫉妬した女子により、陰湿なイジメを受ける。
ヒトミが嘘泣きした瞬間、全男子生徒の怒りが爆発。
イジメのリーダーを痛めつけることに成功する。
彼女は転校した。

ＸＸ年Ｘ月、体育祭が開催される。
しかし、ヒトミのファンが全国から殺到。収集がつかなくなる。
結局、コンサートでもないのにチケット制になった。

ＸＸ年Ｘ月、「そうりだいじん」がヒトミのファンであることを宣言。
ヒトミはその新聞を破り捨てた。

ＸＸ年Ｘ月、貰ったラブレターの数が１０００を突破。
ちなみに全てドブに捨てた。

ＸＸ年Ｘ月、勇者ブームが巻き起こる。
スーパーに「勇者グッズ」が売られるようになる。
国家試験に勇者試験が追加される。
童謡「１年生になったら」の変え歌である「勇者になったら」が大人気になる。

ＸＸ年Ｘ月、「ホテル」の名称が全て「宿屋」に変更される。

ＸＸ年Ｘ月、課題図書に「勇者の品格」が指定される。
ヒトミはこれを拒否。
担当教師に最高の笑顔でお願いし、免除してもらうことに成功した。

ＸＸ年Ｘ月、Ｍ先生が離婚。
原因は、ヒトミの写真を邪な目で見ていたのが妻にバレたから。

ＸＸ年Ｘ月、夢で前世の自分と対面する。
人間の醜さを理解すると共に、生まれつき人が好きではない理由を知る。
同時に能力が発現。
自分の一定の周囲を「支配」する力を得た。
原因は不明。

ＸＸ年Ｘ月、旅に出る。

2話　XX年X月（後書き）

次回からしっかりお話を進めます～

3話　国外へ（前書き）

皆様、地震は大丈夫でしょうか。

3話　国外へ

――――大陸『ゆーらしあ』

チキュウ上で最も広大かつ危険な大陸。
船を使わないと行けない場所。
ヒトミはニホンを出て、まずそこへ向かうことにした。
持ち物はゼロに等しい。
服装は制服の上に、大きなローブのような物を着てフードを被り、一見男か女か分からないような格好をしている。そうしないと、自分の正体がバレると思ったからだ。
ヒトミは、ニホンでは有名人だ。普通に歩いていたら間違いなく声を掛けられ、騒ぎになるだろう。そうなったら、最早旅どころではない。また、しっかりと旅の準備をして出掛ける訳にもいかなかった。学校周辺には『ヒトミちゃんふぁんくらぶ』とか名乗るストーカー組織の人間がいる。奴らの観察力（変態力？）は凄まじく、ある時は、突然「ヒトミちゃん、今は生理中？」とか話しかけてきた。（しかも、その通りだった）言うまでもなくセクハラなので、足を払って勢い良く投げ飛ばし、その後職員室に突き出したが、そんな些細な変化すら読み取れる彼等には、正直寒気がした。そのため、荷物もほとんど持たず、半ば紛れるように国を出ることにしたのだ。ちなみに、投げ飛ばされた少年が極度のM体質であり、鼻息を荒くしていたというのは余談である。
ヒトミは先のことは考えず、とにかくどこかへ行きたかった。決まった日常から抜け出して、なるべく人と交わらない生活がしたかった。

船乗り場へ着くと、丁度船がやってきた。ヒトミの他に、ここで乗船する客はいないようなので、まさにグッドタイミングという表

現がピッタリではないだろうか。

「坊主、金はあるのか？」

ずんぐりした、船長と思われる男が船の上から身を乗り出して叫んだ。ヒトミがポケットの財布から、お金を取り出すのを見ると、船長はニヤリと笑って手招きする。

「よし、乗れ。客は神様だからな」

ヒトミは無言のまま大船に乗り込んだ。

比較的豪華な船だ。部屋は広く、レストランも設置されているらしい。また、十数人の大人が、何やら厳つい顔で歩き回っている。おそらくは勇者の国家資格を持っている人間だ。魔物が出現した時の用心棒代わりだろう。ニホン人は少ない。大体が外国人だ。これは、ニホンでは勇者の国家試験が最近採用されたばかりで、十分な人数がいないことを示している。唯一ラッキーだったのは、あの『勇者の品格』の作者が、『旅をすることは人生で重要なことだ』と主張したおかげで、このような交通機関の利用が、金銭的にも場所的にも楽になったことだろう。彼がヒトミにもたらした、数少ない利益と言える。

「坊主、目的地はどこだ？」

「……『ゆーらしあ』のマガダン」

「あ？　『マガダン』だと？　正気か？」

そう言うと、船長はヒトミの全身をじろりと見た。生まれてから常に晒されていた舐めるような視線ではない。船長はヒトミを男だと思っているらしい。（女性が一人で船に乗るなど、まず有り得ないことなので、当然と言えば当然だが）

「知らねぇのか？　あそこは今危険なところだぜ。どっかの洞窟にいる魔物の動きが活発になったらしくてな、近くの村にも避難勧告が出されてるらしい。勇者学校の実習で来たって訳じゃねえだろう？　坊主が行っても死に行くようなもんだぜ」

「……」

興味がないと思った。それに、船長の言ったことは当然知っていた。黙ったままの客を見て、船長は思案顔で顎に手を当てると、やがて普通の表情に戻る。

「まあ、俺にはあんたの事情に興味はないし、心配をする義理もない。取り合えず、金は貰ったから乗せるが、自分の身は自分で守ってくれ。俺に責任はない。わかったか？」

頷くヒトミを見ると、船長は踵を返し、その場から離れていった。

◆◇◆◇◆

船の中では、努めて人が少ない所にいるように心掛けた。周りには団体や男女のペアが多く、至る所で賑わっている。踊りながらオルガンを鳴らし、それに楽しそうに手を打っている集団もある。普通だったら、興味に惹かれて混じってみるところだろう。しかし、彼女にとってその音は不快なものでしかない。変人だと思われようと、基本的に部屋の隅にいることを選んだ。そもそも、他人からどう思われようと、彼女の知ったことではないのだが。

「なあ、一人か？」

突然の声に反射的に振り向くと、三人の男子が立っていた。どこ

かの高校の生徒だろうか。
一番左は、背の高さがヒトミと同じくらいで、どこか挑発的な雰囲気を感じさせる少年だ。ヒトミの身長は１５８？だから、体格がいいとは言えない。男子であることを考えると、小柄と言っても全く問題ないだろう。
真ん中にいるのは対照的に一番背が高く、ガッチリとした体格をしている。ラグビー部だったのではないかと思わせるほどの肩幅の広さと足の筋肉は、「守ってくれそう」などという幻想を抱いてしまう女性が多く出てきそうである。もちろん、ヒトミには興味ないが。
一番右は、どこかの王子様のような容姿をしている。背は高く、すらっとした体系で、高級そうな衣服を身に着けている。やわらかく笑っているその姿は、見ただけで、恋に落ちる女性もいるのではないだろうか。所謂美形というやつだ。
皆、共通点がない。
左から、かわいい、たくましい、美しい、という表現がピッタリ当てはまるバラバラのメンバーだ。その三人が、ヒトミの前に来て声を掛けてきた。

「お前、俺達より年下だろう」

一番小柄な少年が声を発した。
だったらなんだ、と思いながらも無言で頷く。彼等が高校生なら、自分より年上には違いない。

「見ろよゴウ！　オレより小柄な奴だっているじゃねぇか！」
「本当だな。これは驚いた。まさかお前みたいなチビが他にいたとはな」
「チビって言うんじゃねぇよ」
「チビが嫌か？　だったら『ち☆び』に改名しよう」

「☆が入っただけじゃねぇか！」
「違う、よく見ろ。平仮名になってるじゃないか」
「変わらねぇよ！！」
「まあまあ、落ち着いて。……あ、ごめんね」

冷めた目をしたヒトミを見ると、慌てて謝った。

「でも本当に珍しいね。この船はゆーらしあ大陸行きだろう？　僕達みたいな訓練を受けた者はともかく、君は危険じゃないかな。目的地はどこ？」
「……『マガダン』ですけど」

別に隠すことでもないし、しつこく聞かれても面倒なので素直に答える。すると、目の前の少年、そしてさっきまで言い争いをしていた二人も、驚いたように目を見開いた。

「馬鹿か！？　あそこは今B級の危険地帯だ！　俺の学校の実習だって最上級生の中で一握りの奴しか行かせて貰えない！」
「俺の学校でもだ。シュウはどうだ？」
「……二人と同じだよ。それにしても、君はどうしてそんな危険なところへ？」

シュウと呼ばれた美しい少年は、三人を代表して尋ねた。視線がヒトミに集まる。きっと、「どうして君のような幼い少年が」という意味だろう。三人の様子を見ると、どうやら船長と同様に、ヒトミが男だと思っているようだった。声を聞けば女だと気付きそうな気もするのだが、先入観というものは恐ろしい。まあ、確かにヒトミの声はソプラノというよりアルトなので、声変わり前の少年のように聞こえなくもないが。

「……特に理由はありません」

ヒトミの答えに、三人はさらに目を丸くした。

それは当然の反応だ。

理由もなく、危険な場所に行くなど、興味本位のバカか、自身過剰のバカ、つまりどちらにしろ「バカ」な人間ということになる。

しかし、ヒトミはなるべく人と交わらない生活を望んでいる。避難勧告が出されていて、人があまりいないであろう『マガダン』に行くことは、彼女にとってはむしろ当然のことだった。

そんなことを、この三人が知る訳もない。

「やめておけ。死ぬつもりか？」

なんとも迷惑な忠告をしてきた。

「……別に死ぬつもりなんてありません」

「でも危険だよ。僕達は『アヤン』へ行くところなんだ。学校の実習でね。良かったら君も一緒にどうかな？」

「……何故初対面の人間にそこまで？」

大きなお世話だ、という意味で言ったのだが、どうやら別の意味にとったらしい。少し照れ臭そうな顔をして言った。

「いや、この船、大人ばかりじゃないか。年齢が近い人がいるなら、折角だから仲良くしようと思ってね」

ヒトミは周りを見渡した。確かに、大人ばかりだ。歌を歌って賑やかにしている人も、トランプをして怒鳴り声を上げている人も、皆若いとは言い難い。自分だけが浮いたような存在であることに、心細さを感じる気持ちは分からないでもなかった。

「それに、カズもゴウも、ここに来るまでのバスの中で会ったばかりなんだ」

それは意外だった。先程のじゃれ合いを見る限りでは、三人は旧知の仲のように見える。うまく波長が合ったということだろうか。もしかしたら、皆どこか不安を感じていて、それが仲良くなることに影響したのかも知れない。しかし……

「嬉しいですけど、結構です」

ヒトミはその提案を拒絶した。

「なんだよ！　折角誘ってやったのに！　俺達はみんな『勇育高』の生徒だぞ！」

カズと呼ばれた小柄な少年は声を張り上げた。

彼の台詞は普通なら間違っていない。誘いを断ったヒトミは薄情者だろうし、『勇育高』（勇者育成専門高等学校の略称。ちなみに第一～四校まである）の生徒だというのは、聞く者に畏怖と尊敬を抱かせる。

しかし、ヒトミは前提がまるで違う。

「誘ってやった」というのは迷惑なことだし、「『勇育高』の生徒だ」と主張するのは、彼女にとってはむしろ逆効果である。それ故、カズが叫んだ瞬間、ヒトミの中で彼等は『最も付き合いたくない人間』のカテゴリーに分類された。

「自分の身すら守れそうにないあなた方と、一緒に行動するつもりはありません」

それは紛れもない本音だった。たかがB級の危険度で足が竦むような人に、身の安全を心配される筋合いはなかった。それに、彼等は今この瞬間、他の船が近付いてきていることに気付いている様子もない。

しかし、自分より明らかに力の弱そうな奴に馬鹿にされたのが気に食わなかったのだろう。ゴウという最も体格の良い男が顔を引き釣らせた。

「ほう、ならお前は大層な力を持っているんだろうな」

「…ゴウ、やめなよ」

静止の声に、ふんと鼻を鳴らす。

「虫も殺せそうにないガキがよく言う。もう誘わないから、後で言っても遅い。行くぞシュウ、カズ」

ズカズカと歩き出したゴウの後を、同様にカズが（ズカズカと言うよりトコトコだが）歩き、その後ろを、少し困ったようにシュウが追いかけた。

ようやく一人になり、ヒトミはほっと安堵の息を漏らす。

震える体を抑え、天を仰ぎ見た。

シュウ、カズ、ゴウ

彼等は後に色々な意味で、自分達の認識が大きく間違っていたこ

とに気付かされるのだった。

3話　国外へ（後書き）

誤字脱字があったら教えて下さい～

4話　闇夜の襲撃（前書き）

い、いつの間にかお気に入りが増えてました！

ありがとうございます！

4話　闇夜の襲撃

夜の闇を裂くように誰かの絶叫が木霊(こだま)した。
シュウは飛び起きると、闇に慣れていない目を凝らしながら辺りを見渡す。
もうとっくに日は落ち、一面を夜が支配していた。船長室の窓だけが、ぼんやりと人魂のように浮かんでいる。どのくらい眠っていたのか分からないまま、シュウは状況を確認すべく、甲板へ向かった。

「シュウ！」

声がした方を振り向くと、二つの人影が見えた。時間が経つにつれて、その輪郭が明らかになっていく。息を潜めて立っている二人は、ゴウとカズだった。
訓練を受けた者らしく、眠そうな様子は微塵も感じさせない。そのことからも、二人が相当の実力者であることが窺えた。

「今の声……聞いた？」

息を殺したまま、ゴウに向かって問いかける。それの問いかけに対し、落ち着いた様子でゆっくりと頷いた。

「ああ、間違いなく人の声だ。それに、普通の声じゃなかった」
「何かあったのかな…」
「結構遠くから聞こえたような気がしたぜ。俺が寝てたのがあの……ん？」
「どうしたカズ」

突然言葉を切ったことを不振に思い、視線を向ける。カズは目を瞑り、耳に神経を集中させているように見えた。それに釣られて、シュウとゴウも耳を澄ませる。

「別の……船？」

カズがポツリと呟いた、その瞬間だった。

ウォォー！　という雄叫びと共に、何者かが船に乗り込んできた。剣をギラつかせ、目を欲望の色で燃え上がらせながら。

「賊だぁー！」

船内が一瞬にしてパニック状態に陥る。誰もが我先にと、安全な場所を求めて逃げ始めた。

しかし、ここは船の上。

周りは海に囲まれているため、逃げ場などあるはずがない。必然的に、船客は階段で上に登り始めた。

対照的に、シュウ達三人はそれぞれの武器を手に持つ。

シュウはレイピアと呼ばれる細身の剣。カズは二本のダガーナイフ。ゴウは拳にはめるパワーナックル。

彼等はその年齢に合わず、相当の訓練を積んだ者達だ。その力は、各校でもトップクラス。だからこそ、国外実習という危険な試験を認めて貰えたのだ。

「いくぜ！」

格好良い台詞と共に（言うまでもなく皮肉である）カズが飛び出した。

小さな体を（本人が聞いたら怒るだろうが）を生かして、風のように走り抜ける。

賊が持つ剣の内側に潜り込み、先制の一撃を食らわした。

「な、なんだ！？」

今度パニックに陥ったのは賊の方である。いきなりの攻撃、しかも疾風のような動きを、果たして何人が視認できただろうか。

それでも、頭の回転が速くて冷静な数人が、カズを見つけるや否や、巨大な剣を振り回してきた。

「シッ！」

後から追いついたゴウが、それを体ごと吹き飛ばす。

カズに迫った剣を素手で叩き折り、反撃の隙を与えない。

「いきなり飛び出すな」

「こういうときは先手必勝なんだよ！」

どつき合いながら、二人は次々と賊を倒していった。その連携は見事と言うより他はない。ついこの前出会ったばかりだというのが信じ難いほどだ。

一方のシュウは……

「ほう…」

その様子を見たゴウは、感嘆の声を漏らした。

シュウの剣技は一流そのもの。賊を三人相手に、圧倒的な力を誇っている。相手の巨大な剣を、力で防ぐのではなく受け流し、それでいて隙があれば容赦なくレイピアを突き立てていた。その優美さは、例えるならば野を舞う蝶だろうか。（これもまた、本人が聞いたら嫌がりそうな表現だが）これを見たゴウとカズは、シュウとい

う少年の認識を改めた。

「なんだコイツら！？」

一人、また一人と、逃走を始めた。

賊の人間は、確かに数で考えると圧倒的だが、逆に言えばそれだけだった。戦闘の腕は未熟なものである。そんな人間が、正規の訓練を積んだ彼等にかなうはずはなかった。

確実に、賊を追いつめていったかに見えた。が……

ドォォン！！

激しい爆音が響いた。

暗闇の中、場違いなオレンジ色が、やたらと鮮明に輝いている。

「おい、今の…ヤバいんじゃ…ねぇか？」

カズの言葉に間違いはない。爆発は疑いようもなく、この船の動力室付近で起こっていた。賊が自分の船に逃げていく間、序々に船が傾き始める。どうやら、船底に大きな穴も空いたようだ。

「クソッ！　あいつら…」

「待てカズ！　今はこの船から脱出するのが先だ！」

「脱出ったってどうすれば……」

その間にも、船はどんどん傾き、沈んでいく。賊から逃れるために船の頂上付近にいた船客は、真っ先に落ちていった。

そんな中、救命ボートに乗って脱出しようとしている人影があった。船長である。自分の財産や荷物だけしっかりと持ち、悠々と逃げ始めた。

「あの船長、自分だけ…」
「それよりあのボートだ！　きっともうひとつあるはずだ！」
「待ってゴウ！　あの子がまだ…」
「あの子？　ああ、昼間のガキか。ほっとけ！　それに、今はそれどころじゃない」

すぐに反対され、シュウは口を閉ざした。それは、彼の言っていることが正しいと思ったからである。自分達も助かるかどうか綱渡りの状態で、他人の心配などしている場合ではない。無理矢理自分を納得させて、シュウもボートを探した。

「おい、あったぜ！　この横に掛かってるやつじゃねぇか！？」
「どれだ！？　……ああ、間違いない」

カズが見つけたものは、先ほど船長が使っていたものと、同じボートだった。急いで運び、中を点検する。船の穴から噴き出た海水は、もう腰まで浸かっていた。

「急げ！　乗り込むぞ！」

三人は一気にオールを漕ぎ始めた。船が沈むことによって生じる波が、ボートの自由を奪っていく。それでも懸命に、力強く漕ぎ続けた。

さらに不幸が襲う。

暖かい人肌を感じ、海の魔物が集まってきたのだ。人間の１０倍近い大きさで、口が異様に大きなものもいれば、でっぷり太った気持ちの悪いものもいた。普段は海底近くで暮らしているのだが、落ちた船客達が呼び寄せてしまったらしい。新鮮な人肉を求めて血走った目は、背筋が凍りそうなほど冷たかった。

「こんな状況で戦うのは無理だ！　逃げろ！」

ゴウが叫ぶまでもなく、全力でオールを漕ぐ。うまく動かせないが、今の奴等は落ちていった人間を貪ることで夢中だった。逃げるチャンスがあるとすれば今しかない。後ろから聞こえるおぞましい音に耳を塞ぎ、必死の思いで逃げ出した。

◆◇◆◇◆

波の音が耳に心地よく響いた。

服に海水が染み込んで、ひどく重たい。風が吹くと、寒さで体が震えた。

「助かっ……たのかな」

横を見ると、ゴウもカズが自分と同じ格好で倒れている。一瞬、死んでいるように見えて焦ったが、呼吸がリズムを刻んでいることが分かって、ホッと胸を撫で下ろした。

「ようやく起きましたか」

「！？」

聞き覚えのある声に顔を上げると、ぶかぶかのローブに身を包み、フードを深く被った少年が立っていた。フードのせいで表情はよく見えないが、決して喜んでいるわけではないような口調だ。

「君が……助けてくれたの？」

「違います。あなた達が自力であの危機を乗り越えたんですよ。覚えてませんか？」

「……あんまり」

正直、無我夢中だったため、よく覚えていなかった。ついさっきのことなのに、夢だったような気さえする。しかし、ずぶ濡れの衣服と痺れる両手両足、それに胸に刻まれた恐怖が、夢ではなかったと主張していた。

「ゴウ、カズ、起きて。大丈夫？」
「む……うっ」
「んあ？」

シュウに体を揺すられ、気絶していた二人も目を覚ます。

「…シュウ」
「助かったよ。なんとか危機を脱出できたみたいだ」
「こ、ここはどこだ！？　船は……ってお前は！？」

カズがローブの少年に気づくと、裏返ったような声を出した。ゴウも気付いて、訝しげな視線を送る。

「お前…無事だったのか」
「それはあなたが口にする台詞ですか？」

よく見ると、自分達は全身びしょ濡れなのに対して、彼は全く濡れていなかった。それどころか、汚れ一つない。服は新品のように綺麗で、まさに最初に出会った時のままだった。

「一体どうやって…」
「それより！　あの船はどうなったんだ？　乗客は？」

ゴウの疑問は、カズの新たな疑問によって打ち消される。ローブの少年は一瞬、ムッとした空気を纏った。きっと、起きて早々、質問攻めに合っていることに不服なのだろう。どうやったか分からないが、彼もきっと命からがら逃げてきたのだ。（実際はまるで違うが、シュウ達が知るわけもない）

「乗客の人はみんな落ちて死にました。船長はうまく逃げたみたいですけど」
「畜生、あの船長！　自分だけ助かりやがって」
「全くだよ！　助けようともしてなかった」
「？　当然でしょう」
「「「なっ」」」

三人は思わず目を見開いた。
そんなことは構わず、まるで自分の言葉の正当性を信じて疑わないような口調で続ける。

「あの船長は、確かに『乗せてやる』とは言っていましたが、安全を保証するとは一言も言ってません。船に何人か勇者がいましたが、それでも『自分の身は自分で守れ』と言っていました。それを承知の上で、あの船に乗ったんじゃないんですか？」
「確かに正論だが、人間ならば『正義』を知るべきだ」
「ではあなたは知っていると？　それでは聞きますが、あなた方はあの状況で、他の乗客が救えましたか？　自分のことだけで精一杯だったのではないですか？」

指摘されて言葉に詰まる。
確かに、彼らも余裕がなかったからだ。

「いくら助けたいと思っても、実際に出来なければ何の意味もあり

ません。そういう意味では、あなた方はあの船長と同じです」
「この野郎！　言わせておけば…」
「やめろ、カズ。その通りだ」

カズをなだめたのは、意外にもゴウだった。
その目に怒りはなく、いつもの冷静な色を宿していた。

「結局、力がなければ何の意味もない。大切なものは愚か、自分の身すら護れない。それが、今回のことでよく分かった」
「…そうだね。僕達はまだ未熟だ。だからこそ、この旅を通して、もっと成長しなきゃ」

三人は、改めて自分のやるべきことを再認識した。
互いに視線を重ね、何かを誓い合うように。

「ありがとう。君のおかげで目的がはっきりしたよ」
「別に何もやってません」
「それでもだよ。そう言えば、まだちゃんと自己紹介してなかったね。僕はシュウ」
「ゴウだ」
「俺はカズ。お前は？」
「ヒトミです」

「「「は？」」」

素っ頓狂な声を出す彼等の前で、フードをとる。
すると、息を呑むほど美しい、絶世の美少女が現れた。

4話　闇夜の襲撃（後書き）

汚い文章ですが、許して下さい～

5話　船上の宴、陸上の苦難（前書き）

登場するゲームの名称は、実際のものとは何の関係もございません。

5話　船上の宴、陸上の苦難

――海賊船「きゃぷてんのお部屋」

ひとりの男が、黙々と作業に取り掛かっていた。
時々額の汗を手で拭い、苦悶の表情を浮かべている。

きゃぷてんだ。
どこからどう見ても、紛(まご)うことなききゃぷてんである。
初見の人でも、間違いなく認識できるはずだ。

なぜか。

別に、彼はコスプレをしているわけではない。
片目に眼帯をしているわけでも、片手がフックなわけでもない。
胸に、「きゃぷてん」と書かれた大きな名札（ゼッケンとも言う）を付けているからだ。

そんな彼が、一体何をそこまで一生懸命やっているのか。
大船の長らしく、いそいそとデスクワークに励んでいるのだろうか。　答えは否である。

「キタァァァァァァ！　テテテ大王撃破！」

ゲームだった。
たった今、丁度クリアしたようである。
先ほどの苦悶の表情はどこへやら、憎らしいほどに爽やかな顔をしていた。

そんな中、騒がしい足音が近付いて来る。
足音はしだいに大きくなり、「きゃぷてんのお部屋」の前で止まった。

「き、きゃぷてん！　大変です！」
「うるせぇぇぇぇぇ！！！」

どっちがだ、とツッコまなかったのは、きゃぷてんに対する敬意の表れか。それとも、それどころではないのか。

確認する手段はない。

「てめー　よく考えろ。もしも今、俺がオナニー中だったらどうしてくれたんだ、あ～ん？　ノックぐれぇしやがれ！」
「も、申し訳ありません！」
「まぁ、いい。今の俺はすこぶる機嫌がいいからな。何せ、星のかーびぃを全制覇したんだ！」
「は……い？　きゃぷてん、それは『げーむぼーい』ですか？」
「そうだ！　羨ましいかバカめ！」
「ま、また随分と古いものを……」

部下の言葉に、きゃぷてんの体はヒビが入った（ように見えた）。

「なん……だと？」
「え…」
「古い？　もう『げーむぼーい』は時代遅れなのか？」

自らをゲームマスターと名乗るきゃぷてんにとって、この事実は衝撃であった。
彼のアイデンティティは崩壊寸前である。

しかし、ここで腐らないのが、きゃぷてんがきゃぷてんたる所以だったりする。

「よし…」

「き、きゃぷてん？」

「船員（クルー）共を集めろ！　今すぐにだ！　早くしろ！」

「はいいいいいい！」

再び、騒がしく走り出した。

……15分後

「きゃぷてん！　やるなら万天堂ＤＦですぜ！　ゾニーには負けやせん！」

「何ほざいてやがる！　音楽から動画まで幅広くこなせるＰＦＰに決まっとるじゃろうが！」

「うるせーぞテメェ等ァァァァ！　……きゃぷてん、如何致しますか？」

「オイ、ひとついいか？」

その場にいる全員が、きゃぷてんから放たれる圧力（プレッシャー）に押し潰されそうになった。

船員達の体に、汗が滲む。

「この携帯ゲーム機……」

ゴクリ…

「し、白黒じゃないだとぉぉぉ！？」

「「「そこからですか！？」」」

きゃぷてんの、あまりの無知さに目ん玉が飛び出る。
「知らなかった。俺の知らぬ間に世界は動いていたのか…」
などと、かなり大袈裟なことを言う彼に、「いつの時代の人間ですか？」と口にする人がいなかったのは不思議である。
鍔然とするきゃぷてんに、青いバンダナを巻いた船員が、ＰＦＰの画面を見せた。
「そんなことよりも、見て下せぇ、きゃぷてん！」
「あん？」

ちゃらら～ららら～んら～ららら～らんら～ら～♪

「な、なんじゃコリャぁぁぁぁぁ！！」
「きゃぷてん、これが『えふえふ』ですぜ！」
「え、映画じゃねぇかぁぁぁぁ！」

きゃぷてんの言うことは一利あった。
ＣＧの美しさを限界まで求めた昨今の「ふぁいなるふぁんたじー」は、ゲームというよりはむしろ映画に近い。
また、聞く人によっては「え？　ふぁいなる？　どこが？」などと致命的なことを言いかねない。
しかし、今まで白黒の「ぴかちゅう」や「すらいむ」達と戦ってきたきゃぷてんにとって、この事実は飛び上がって雲を突き抜けそうなほどの衝撃であった。
「きゃぷてん、こっちも見て下せぇ！」

そう言って無理矢理振り向かせたのは、赤いバンダナを巻いた別の男。
ニヤニヤした面持ちで、ＤＦの画面を見せつける。
「な、なんじゃコリャぁぁぁぁぁ！」
再度絶叫。
今、きゃぷてんの中で、「ゲーム＝二次元」の構図が音をたてて崩れていった。
「う、浮き上がってるだとぉぉぉ！？」
「これが３ＤＦですぜ！」
「さあ！　どっちを選びますか？」
仲間達に詰め寄られ、「むむむ」と声を漏らす。
そこで、先程「きゃぷてんのお部屋」へ足を踏み入れ、船員（クルー）を集めた男（副きゃぷてん）は、大事なことに気付いた。
「そうだ！　きゃぷてん、大変なんです！」
「あ～ん？　どうした？」
「さっき襲った船から、生き残りが数人脱出したとの情報が！」
船内に動揺が走った。
所々で、「あいつらじゃないか？」などの囁きが聞こえる。
「……そいつは本当か」
「確かな情報のようです」
「あの状況から逃げ出したか。なかなかのやり手だろうな」
「どうしますか？」

船員達の視線が、一気にきゃぷてんへと集中する。
その船の人間全員が、彼の指示を無言で待っていた。
きゃぷてんは目を瞑り、腕を組む。

「……『アヤン』へ向かうぞ」
「『アヤン』ですか？」
「ああ、俺達が襲った地点（ポイント）から考えて、奴等が行き着く場所はそこしかない」
「しかし、そう都合良く立ち寄りますかね？　通り過ぎる可能性もあるのでは？」
「それはない。おそらく、そいつらは服も荷物も海に浸かっている。疲労もピークに達しているはずだ。体を休め、必要な物を揃えるために、必ずそこへ向かう」
「…了解しました。総員、配置につけぇぇぇ！　行き先はゆーらしあ『アヤン』だ！」
「「ウオォォォー！」」

雄叫びが上がる。
海賊船は「アヤン」へ向かって進み出した。

◆◇◆◇◆

空気が止まっていた。いや、固まっていたと言った方が正しいか。
シュウ達は目の前の現実に、ただひたすら目を擦った。
しかし、いくら目を擦っても、自分の目が赤くなる以外に何も変わりはしない。鮮明になるのは、あまりにも美しい少女の「何この人達、馬鹿なの？」とでも言い気な視線だけであった。
「なんですかその反応は。もしかして馬鹿ですか？」

ビンゴ。
目は口ほどに、とはよく言ったものだと、ゴウは密かに感心する。
「お、おまっ　お、女だったのか！？」
最初に現実に帰ってきたのは（声が裏返っていて、いささか不格好ではあるが）カズだった。
ヒトミを指差しながら、大声を上げる。　ヒトミはそれに、あからさまに嫌そうな顔をした。
「別に男だと名乗った覚えはありませんが」
「……普通男だと思うだろ」
「……そ、そうだよ！　僕達が勘違いしてることに気付かなかったの？」
カズの大声で正気に戻ったのか、ゴウとシュウもヒトミに対して抗議の声を出す。
動揺する彼等を尻目に、ヒトミはため息をついた。
一般人だったらば、ブン殴られても文句は言えないタイミングだ。
しかし、ヒトミの物憂げな表情は、見る者を惹きつけて止まない魅力を放っていた。
美人がやるだけで、同じ仕草でもここまで違うものか。
壱万円札及び、「天は人の上に人を創らず」で有名なユキチ・フクザワ先生がこれを見たら、狂気錯乱しそうである。
逆に、「上下天分の理」で知られるラザン・ハヤシ先生が見たら、どや顔するかも知れない。
そんな魅力に、彼等が戸惑っているなど、ヒトミが知る由もなく、
「聞かれなかったから答えなかった。そして、今は聞かれたから答えた。それだけです」

極めて冷静に答えた。

「聞きたいことはそれだけですか？　ではさっさと歩いて下さい」

「…え、ちょっ　どこへ行くつもりなの？」

「不本意ですが『アヤン』へ向かいます。船での移動手段がなくなったので、仕方ありませんが歩きです」

「ま、待てよ！　ここから歩き？　俺達はたった今、目が冷めたばかりなんだぜ！　もう少し休んでから……」

「塗れた服を着て、海風の強い所で『休む』とは、随分と物好きですね」

その瞬間、一段と強い風が吹いた。そのあまりの寒さに、身を震わせる。

ヒトミの衝撃で忘れていたが、体は冷えきっていた。

海水を吸い込んだ服が、体力を奪っていく。

ヒトミは、彼等がくたくたであることなど、とっくに見抜いていた。

会話を最小限に抑えたことも、早めに行動した方が良いと判断したからである。

「まずは服を乾かして下さい。そのために、森へ入って火を起こします。分かったら、さっさと歩いて下さい」

◆◇◆◇◆

深い針葉樹林だった。

シュウとカズは乾いた枝を集め、ゴウは焚き火ができそうな場所を確保して、穴を掘っている。未だ寒さは癒えず、枝を持つ手はうまく動かないが、さっきよりは大分良くなった気がする。木が茂っ

ているせいで海風が届かないことが大きな理由だろう。シュウは、ヒトミの機転に感心した。

「ゴウ、お前…　火なんか起こせるのかよ？」
「ああ、出来る。多少時間は掛かるが、我慢しろ」

ゴウは細い木を、倒れている大木に押しつけ、高速で回転させている。
摩擦で火を起こす、極めて原始的な方法だ。

「……ついた！」

枝の先に起こった小さな火を、集めた枯れ葉に移動させる。枯れ葉は勢い良く燃え上がり、その炎は横の薪に燃え移った。
激しく燃え上がる火に、彼等は夢中で手を伸ばす。
冷えきって強張った体と心を、炎の熱がほぐしていく。

「…助かったね」
「ああ。こんな外れた所に森があるとはな。驚きだ」
「って言うか、アイツはなんでこんな場所知ってんだ？」

アイツとはヒトミのことだろう。
いきなり現れて、助けてくれた少女。
どこか冷たく、他人を寄せ付けない空気を持った少女。
そして、今まで出会った、どんな女性よりも美しい少女。

「ねぇゴウ、彼女のこと、どう思う？」
「…はっきり言って分からん。何がしたいのか、何が目的でこんな危険な所へ一人で来たのか、どうやってあの船から脱出したのか、何もかも全く分からん」

「でも、悪い子じゃなさそうだよね」
「生意気だけどな！」
目の前にヒトミがいた時は、空気に呑まれて口数が少なかったカズも、今は饒舌である。
「あれ？　そう言えば、アイツはどこだ？」
ヒトミの姿が見えないことに、今更のように気付く。
「きっと、僕達が服を乾かせるように、離れてるんだよ」
「そうだな。あいつが側にいたら、とてもじゃないが脱げない」
ゴウの遠慮ない台詞に、シュウとカズは赤面した。
見られたかった、などと言うドMなことを考えていた……かどうかは定かではないが、美少女の前で裸になどなれないだろう。恥ずかし過ぎる。
「今の内に服を干すぞ。そうしたら、早くヒトミと合流しよう」
彼等は服を脱ぎ始めた。
◆◇◆◇◆
ヒトミは、シュウ達と離れた所で、魔物達と戯れていた。
普段の彼女からは想像できない、柔らかい笑み。いや、本来のヒトミはよく笑う少女なのだ。
「ガグルル♪」

目が三つある、異形の獣がヒトミを取り囲む。
本来ならば人に懐くことなど有り得ないが、ヒトミが頭を撫でた瞬間、嬉しそうに手を嘗めてきた。
ヒトミも嬉しそうに笑うが、表情にはどこか陰が差す。
「なんで助けたのかな…」
魔物の頭を撫でながら、自分自身に問いかける。
それは、自分の良心との戦い。
誰にも相談できない、誰にも分かって貰えないであろう苦しみ。
「『瞳』、私は…あなたの仇を討てるかな……」
普段の冷静で強い「ヒトミ」はそこにいなかった。
１４歳の、か弱い少女だった。
優しい人間は、他人の痛みを自分の痛みのように感じる。
故に、優しい人間は常に受難者であると、人は言う。
ヒトミは、非情になるにはあまりにも幼く、あまりにも優し過ぎた。
明日もまた、彼女は「無表情」という名の重い仮面を被らされ、人と接するのだろう。
それは、誰も知らないことだ。

5話　船上の宴、陸上の苦難（後書き）

感想お待ちしております～

6話　異様と異端（前書き）

お久しぶりです。

まさかこんなに空くとは思ってませんでした（汗）

綺麗にまとまった文章とは言い難いですが、そこは大目に……

6話　異様と異端

森が思ったより深いことに、ヒトミは奇妙な違和感を覚えた。寒冷な「ゆーらしあ」の気候からすると、ここまで深い森も珍しい。自然がありのままの形で残っている。

ヒトミは、シュウ達が近づいてくる気配を感じ、三つの赤い目を持つ獣たちに別れを告げた。森で自由気ままに生きる魔物たちと、勇者学校などというイタイ学校に所属する彼らを引き合わせることは、決してベストな選択とは思えない。ただ単に「魔物」であるというだけで、大袈裟なリアクションとテンションで、野蛮に武器を振り回す彼らの姿が目に浮かぶ。残念ながら人間という種族に分類される自分と魔物とが、仲良くやっている現場を目撃されるのも、色々と面倒だった。

「ウゥゥゥゥ……」

悲しそうに鳴く獣の頭を、優しく撫でる。と、その中の一匹が丸い果実を差し出してきた。持って行けということだろうか。ただ座って頭を撫でたりしていただけなのに、妙に気に入られたようだった。ヒトミはお礼を言って、その果実を受け取る。

それはヒトミ自身は見たこともない果実だった。

しかし、懐かしいと感じずにはいられない果実だった。

大きさは丁度リンゴ一個分ほど。ブドウとモモをたして二で割ったような色で、手にすると、甘酸っぱい香りが一面に広がった。

今の世の中で、この果実の名称を知っている人間が、果たしてどれほどいるだろうか。おそらく、ごく少数なはずだ。そして、ヒトミはその少数の中の一人ということになる。

脳裏に再生される景色に、郷愁のような愛しさと溢れんばかりの憎しみを同時に感じたヒトミは、不協和音に軋む胸を抑え、なにも

かも追い払うように、その果実に噛り付いた。

◆◇◆◇◆◇

「なんでここで寝なきゃならねぇんだよ！」
「いえ、別にそうしろと強制しているわけではありませんよ？　私はそうすると言っているでけです。あなた方はお好きにどうぞ」
「でも……　一人は危険過ぎるよ！　この森、まだ安全かどうか分からないし、もし何かに襲われでもしたら……」
「男（オオカミ）が何を言いますか。寧ろ一人のほうが安全です」

振り向くことすらせずに切り返す。
シュウは最初、意味が分からないとでも言いたげに首をかしげていたが、気まずそうに顔を背けるカズとゴウの態度を見るとようやく理解し、端正な顔を赤く染めた。

シュウもカズもゴウも男性である。それも、お年頃の。
そしてヒトミは女性である。それも、とびっきり美人の。
さらに現在地は人気のない森の中。
舞台が見事に整ってしまっていた。

「「お、襲わない（ねぇ）よ！」」
「そんな必死に否定されても説得力がまるでありませんね」

彼らの弁明を、ヒトミは容赦なく切り捨てる。
そもそも、最初から「襲うよ」などと宣言する馬鹿はいないので（一部の変態は除く）、説得力などあるはずもなかった。

「それはそうと、この森で一晩過ごすことに、なにかメリットでもあるのか？　俺としては、できるだけ早く『アヤン』へ向かった方

が得策だと思うが」

話が若干横道に逸れたところで、冷静なゴウの声が、話を本題に引き戻した。図らずも、それは動揺していたシュウとカズへの助け舟となり、気まずかった空気を吹き飛ばす。二人は、こっそりと安堵の息を漏らした。

「今から歩いて向かったら、到着は夜中になります。私は休みなしで歩き続ける自信はありませんし……」

真っ先に逃げ出した船長の言葉を思い出しながら続ける。

「なにより夜中では村の門も開いていないでしょう。現在は洞窟の魔物の活動が活発化していると聞きました。そんな状態で、全く見ず知らずの人間を村に入れてくれるとは思えませんが」

まるで最初から用意していたかのような答えが、口から滑らかに滑り出る。安堵の息を漏らしていたシュウとカズは、今度は感嘆の息を漏らすはめになった。質問したゴウ本人も、ヒトミの深い読みに驚いている。ちなみにこの時、ヒトミだけならば、夜でもなんでも喜んで迎え入れて貰えるのではないかと、陰で三人が同じことを考えていたというのは余談である。

「なるほど……」

ゴウが納得したように頷く。

自分の考えの甘さに若干呆れつつ、そしてヒトミから予想以上に丁寧な説明がかえってきたことにやや驚きつつも、彼女に出会えた幸運に感謝した。

もしヒトミに会わなかったらば、自分の体力のことも考えずに濡

れた服のまま倒れるまで歩き続けていたかもしれない。案外、彼女は冷たい態度を取りながらも、しっかり全員のことを考えて行動してくれているような気がした。

「……どうする？」

視線を横にずらして、珍しく無言のカズと、感心しきった表情のシュウに問いかける。

「チッ、しょうがねぇな」

カズが頭を掻きながら、表面上は面白くなさそうに呟く。

「えーっと僕も構わないけど……　ヒトミが良ければ……」

シュウは、少し困ったようにヒトミを見る。

先刻（さっき）の男発言（オオカミ）をまだ気にしているのだろうか。

彼らしいといえば彼らしかった。

「どうぞ、ご勝手に」

そしてこの返答も、彼女らしかった。

◆◇◆◇◆◇

「今から一時間、ここから先へは入れませんから気を付けてください」

「「「は？」」」

男三人衆は、ヒトミの「入るな」ではなく「入れない」という言

葉づかいと、地面に線を引くという厨二臭い（？）行動に、素っ頓狂な声を出した。

「……えーと、一応聞いていいかな？」

「なんですか？」

「……入ったらどうなるのかな？」

「ですから、入れないと言っているでしょう。その耳は飾りですか？」

至極当然と思われるシュウの疑問も、いつもの調子で返される。その対応から、別に冗談を言っているわけではないと理解はできたが（そもそも冗談を言うような性格ではないが）、それ故に対応に困ってしまった。

ヒトミは何を言っているのか？

そんな彼らの疑問には答えず、ヒトミは歩いて去って行った。

◆◇◆◇◆◇

「なあシュウ、あいつは何やってんのかな？」

カズがシュウに問いかける。あいつとは言うまでもない。ヒトミのことだろう。

先ほど線の向こう側へと消えたきり、姿を現さない。

もちろん、興味がないわけがなかった。

「分からない……　けど『入るな』って言ってたし……」

「正しくは『入れない』だったがな。そんなことより、二人とも手伝え。魚を捕まえるか、穴を掘るか、どっちか選べ」

「はいよ、いくぞシュウ」

「うん……」

ヒトミが消えた方角へ目を向けたまま、シュウもカズに続いた。

◆◇◆◇◆◇

「なあ、やたら……固(かて)ぇんだが……どういう……ことだ？」

汗を滝のように流しながら穴を掘り続けていたカズは、途中から明らかに土が固くなったのを感じ、堪らずに抗議の声を上げた。

「なんだ、魚も捕れないかと思えば、穴も掘れないのか？　本当にチビは使えない」

「チビって言うな！　そこまで言うならお前が掘ってみろよ！」

憤るカズをなだめながら、シュウが穴掘りに参戦する。が、少しすると同様に顔を曇らせた。

「これ……土が固いというよりは、何かが埋まって……る？」

「どれ、ちょっとどいてろ」

シュウの反応を見て、ただ事ではないと感じたのか。

すぐさまゴウも加わる。

「本当だ。何か埋まってるな」

茶色くて固い何か。端には丸いものがくっついている。

周りを掘っていくにつれ、徐々にその輪郭が露わになってくる。

嫌な空気が漂い始めた。

気づいたのだろう、埋まっているものの正体に。

周りの気温が一段下がったような気がした。

現れたのは人の骨だった。

「何十年……いや、もっと経ってるか。少なくとも最近じゃないな」

目と口泥を大量に詰まらせながらも、笑っているように見える頭蓋骨に、背筋が寒くなる。

「オイ……こっちにもなんか……埋まってるぜ」

「奇遇だな……　こっちもだ」

穴を一つ掘ってしまったせいで、あちこちから他の人骨の断片が見え隠れする。掘り始めた時こそ何も気にしていなかったが、一度気づいてしまうともう人骨にしか見えない。よく見ると、地面の下は人骨だらけだった。

「おかしいよ！」

耐え切れずにシュウが大声を出す。いや、寧ろそれまで耐えていたことのほうが不思議なくらいだ。それほどまでに異様な光景だった。

一体昔、ここで何があったのか……？

「ここは危険かもしれない……」

「そ、そうだな。ヒトミを呼んで来ようぜ」

今度こそ、異論を唱える者はいなかった。

ヒトミの言いつけと身の安全を天秤にかけたら、身の安全を選ぶのが普通だろう。ましてや、あれほど異様な現場を目撃したあとな

のだ。
しかし、ヒトミが引いた線のところまで来ると、彼らの足は意図せずに止まる。
「え？」
動揺が走る。体が前に進まない。
「なんだこれ……！」
別になにか壁があるわけではない。線の向こう側の風景はもちろん目に映っているし、手を伸ばして何かに触れるわけでもない。
まるで体が前に進むことを拒絶しているかのような……
「ふんっ！」
カズが大きな石を投げる。
しかし、石すらも途中で物理法則を無視し、垂直にすとんと落ちる。
「ねぇ、僕ずっと疑問に思ってたんだけど、ヒトミってどうやってあの船から脱出したのかな……」
あまり大きな声で喋っているわけではないが、シュウの声はやたらと響いた。
「ボートじゃ……ないよね。僕たち以外にボートに乗ってる人なんていなかったし」
「泳いだわけでもないだろうな。服は全く濡れていなかった。そもそも泳げる距離じゃない」

「あいつ……何者だ？」
「一応人間ですが何か？」

不意に響いた声に、三人とも体を固くした。
顔を上げて振り返り、そして再び固まる。
ヒトミの髪は、風呂上りとしか思えないほど濡れていた。

6話　異様と異端（後書き）

次も遅くなる可能性がございます～

誤字脱字がありましたら教えてください～

7話　涙（前書き）

ふう……

久しぶりにこっちが書けた……

やっぱり二つ同時に書くのはキツイですな～

7話　涙

ふぁ～っと、場にそぐわない欠伸がヒトミの口から漏れると、硬直していた三人はハッと我に返った。

「ヒ、ヒトミ！？」
「……はい？　何をそんなに驚いているんですか」
「ち、ちょっと待ってよ！　なんで髪が濡れてるのさ！」
「……あぁ、これですか」

シュウの問に数秒考えた後、

「……濡れてませんよ？」
「「「いやいやいやいやいや」」」

全力で否定された。
そもそも見れば嘘だとわかるため、言い訳になっているかどうかすら怪しい。そんなことが分からないヒトミではないのだが、この時の彼女は思考が少々鈍っていた。

「……まあ、あれです。『気にしたら負け』です」
「いや気になるって！　普通は気になるに決まってんだろ！」
「……大きな声を出さないで下さい。小さいくせに」
「ぐはぁ！　お前まで言うか！」

カズは頭を抱え、背中を大きく反ると、余程ショックだったのか、そのままブリッジの体勢になった。何とも美しいイナバ〇アーである。彼は勇者なんかではなくスケート選手になるべきだと密かに思った。

「あ、俺も別件で聞きたいことがある」
「……今度はあなたですか」
「悪かったな、質問攻めにして」
「それで？　なんでしょう」
「この壁のことなんだが……」

そう言うと、ゴウは先ほど物理法則を捻じ曲げた透明な壁を叩いた（正確には叩いてる感覚はないのだが）。壁は相も変わらず物体の通過を拒み続けている。それも、ちょうどヒトミが線を引いた真上だ。何も知らないはずはない。
しかし、ヒトミは一瞬だけ動きを止めると、まるで残念な人を見るかのような表情になった。

「壁が……なんですか」
「いや、ここに壁がある」
「……そこに壁が見えるのでしたら、まずは眼科に行くことをお勧めします」
「オイ、話を……」

聞け、と続けられるはずだったゴウの言葉は、一種の浮遊感によって遮られた。彼はその透明な壁に寄りかかっていたのだが、その壁が突然なくなったのだ。とっさに足が動いたため、転ぶことだけは避けられたが、ゴウは狐に包まれたような気分を味わった。

「一体なにが……」
「起きたんだろうね……？」

顔を見合わせるゴウとシュウ（カズは未だにイ〇バウアー中である）。

……そういえば、ヒトミが腕を振った瞬間に壁が消えたような……
そんなことを思い返し、振り返ると、シュウの目には今にも眠りに落ちそうなヒトミの姿が写った。

「ヒトミ？」
「……はい」
「もしかして眠いの？」
「……眠いです」

眠そうに目を擦る。
その姿がひどく幼く見えて、シュウは自分が意外に思っていることに驚いた。
考えてみれば、彼女は自分たちよりも年下なのである。あまりにも大人びていたために意識の外側に外れてしまっていたが、常識的に考えて、彼女の華奢な体に体力があるわけがない。それに、昼間あんなことがあったのだ。およそ考えられないほどの負担が掛かっていたと考えても、何もおかしくはない。いや、寧ろそう考えるのが普通だろう。シュウは、そんなことにも気づかない自分に嫌気が差した。

「……聞きたいことは山ほどあるが、また今度にするか」

同じことを、ゴウも考えていたようだ。

「どうもアレだな。立場が逆というか……　本来なら、俺たちがアイツを助ける側のはずなんだがな」
「うん、なんか僕たちの方が助けられてるよね。寧ろ負担を掛けてる気がする」
「情けないな。勇者志願者が三人もいて」

語るゴウの表情は、苦虫を噛み潰したような顔をしている。その気持ちは、シュウにもよくわかった。まさに同じ気持ちだったからだ。

二人が話している間にも、ヒトミの眠気は増していく。
徐々に遠のく意識を保とうと、ぺちぺち自分の頬を叩くも、望むほどの効果は得られない。
やがて、ヒトミは睡魔に負けて、その場に横たわった。

「「……」」

気まずい沈黙が流れる。
出会った時から彼女が羽織っている大き目のローブ。その下は、学校の制服だった。黒を基調とした、落ち着いたデザインのセーラー服が、ヒトミの小さな体を包んでいる。
だが、そのまま横になったため、スカートがかなり際どい位置まで持ち上がり……

「……ゴホン」

わざとらしい咳払いの後、彼らは反射的に目を逸らした。

「……お、おい、アイツはなんであんなに無防備なんだ。さっきまで男がどうとか言ってなかったか？」
「し、知らないよ。眠くてそれどころじゃなかったとか？」
「た、確かに。まだガキだからな。仕方ないだろう」
「……心臓に悪いけどね」

ヒトミのような美少女が、自分の横で、しかも無防備な姿のまま寝ていて、男性として落ち着かなくなることを誰が責められようか。

黒い制服と対照的な白く細い素足が、いまだ目に焼きついたまま離れない。こうして見ると、あどけない寝顔も相まって、未完成の色っぽさがあるように思われた。
……成長したらどうなることやら。

「取り敢えず場所を変えるぞ。ここは危険かもしれん。……骨が埋まってたこともあるしな」

そうだ。
忘れていたが、この森はどこかおかしい。
普通の森には、あんなにたくさんの人の骨は埋まっていない。
が……

「えと、ヒトミ……どうやって運ぼうか」
「俺もそれを考えていたんだが」
「ど、どこを持てば犯罪にならないんだろう……」
「普通に運べばいいんじゃねえ？」
「「！？」」

突然会話に割り込んできたのはカズだった。その気配のなさは、今の今まで、ゴウとシュウの二人が全く気付かなかったことから窺えるだろう。

「……カズか。スケートの練習は終わったのか？」
「いや、最初からしてねぇし！」
「しっ！　起きちゃうから」
「ああ、わり」

小さく謝ると、スースーと寝息をたてるヒトミに近づき、

「よっと」

躊躇うことなく両手で担いだ。
それは俗に言う「お姫様抱っこ」。
この時ヒトミの意識があったならば、心底嫌そうな顔をしたことだろう。

「カズ、お前は意外と異性の扱いに長けてるんだな」
「あ？　まあ、オレは下に妹がいるから」
「へ～　それ、初めて聞いたよ」
「言ってねぇからな」
「何にせよ助かる。そのまま向こう側まで運んでくれ」
「分かった。にしてもコイツ……」
「どうした？」
「メチャクチャ軽いな……」

三人は改めて、自分たちを導いた少女が、まだ幼い少女であることを思い知らされた。

◆◇◆◇◆◇◆

いつからだったか。物心ついた時には、もうそれが当たり前になっていたような気がする。
時々、変な夢を見た。
しかし、それは夢だと言い切るには、あまりにもリアルで、生々しいものだった。

「た、助けてくれ……！」

傷ついた腕を庇い、必死で命乞いをする村人がいた。

赤子を抱き、炎の中を逃げ惑う女性がいた。
すでに息絶え、建物の下敷きになる子供がいた。

「何故だ……　勇者は我々の味方じゃなかったのか……！」

絶望に顔を埋め、唇を噛み締める男の人。
……これは父さん？
いや違う。ヒトミの父親はこの人ではない。顔も体格も、一致するものは何一つない。
では何故、本能的に父親だと思ったのか。
毎回のことのようにそんな疑問を抱く頃、必ずヒトミを強く抱きしめる者がいた。

「大丈夫。大丈夫よ……瞳。あなたは私たちが守るから」

声は恐怖で震え、その振動がダイレクトに伝わってくる。けれど、その手は力強くヒトミを抱きしめていた。
……この人は誰？
夢の中で、何度目になるか分からない問を自分に向ける。

悲鳴が上がる。血しぶきが舞う。
鮮やか過ぎる赤が炎の明りで照らされ、もはや目の前のものが何なのか、ヒトミには理解できなくなっていた。
大きすぎる周りの騒音が頭の中で暴れまわり、大気を慌ただしくかき回していく。
わけも分からないまま、ただ逃げる。
手を引かれるまま、何度もつまずきながら。
終わる果てのない、長い長い逃走。ただしその先に待つものは、毎回決まっていた。

「どうか……　どうか命だけはお救い下さい勇者の方々。我々にできることなら、何でも致しますゆえ、どうか！」

頭を下げる村長と他の村人たち。

そもそも一般人と訓練を積んだ勇者だ。勝負は初めから見えていたのだ。彼らは村人に、逃げ出すことすら許さなかった。許してもらえなかった。

必死で頭を下げる村長。

なぜ？

勇者は人々を護る人たちではなかったのか？

「では問う」

代表者らしき男が声を出す。

「この村に瞳と名乗る少女はいるか？」

聞きながら、ああ、またこの展開かと、諦めきった声が内側から聞こえてきた。そもそもこれは夢の中。結末はいつも決まっている。

「その娘を差し出せば、ここにいる全員を助けてやる」

隣の男の人が体を固くした。

ヒトミを抱く女の人が、「……え？」と絶望を露わにした。

そして他の村人は……

歓喜して、何の躊躇いもなくヒトミを売った。

泣き叫ぶ女性の声が響く。

大勢の村人に動きを抑えられながらも、必死で抵抗を続ける男性の姿が目に映る。

ヒトミは抵抗することもできず、勇者と名乗る人間たちに連れら

れていく。

「ふむ、これが例の少女か。噂通りの美しい容姿だ」

「頼む！　その子だけは……　瞳だけはやめてくれ！　私たちの大切な……」

その叫び声の後、ぴしゃっと何かが巻き散らかされる音がした。

糸が切れた人形のように地面に崩れる男性を見て、また新たな悲鳴が聞こえた。

「いやあああああああ！　あなた！　あなたあああ！」

泣き叫ぶ声は、先ほどまでヒトミを抱きしめていた女性のものだ。自分の手や服が赤く染まるのを気にもせず、パニックに陥ったように倒れた男性を揺さぶっている。

やがて、邪魔だと判断されたのか。

長い刃物が、今度はその女性に向いた。

……やめて。

願いは声にならない。

夢の中のヒトミは叫ぶことすらできない。

……お願い。殺さないで！

無駄な抵抗だと分かっていても、願わずにはいられない。それが、何度も繰り返された映像だとしても。

鮮血が舞った。

涙で濡れた顔が、最後にヒトミの方へ向く。

口が動いていた。

———瞳……ごめんね。

哀しげに微笑んで、目を閉じた。

「……」

暗い森の中、涙が頬を伝う感触と共に目が覚めた。

体の上には誰かの上着がかかっていて、寒さは特に感じない。覆いかぶさるように感じる巨大な大樹からは、何かから守ってくれているような安心感があった。

……この夢は何度見ても慣れない。

胸を裂く痛みは誰のものか。

感じる悲しみは何のためか。

———ごめんね。

最後の、あの表情が頭に蘇り……

「うっ……」

人知れず、静かに涙を流した。

自分のものではない記憶が見せた映像。

絶望と悲しみで彩られた夢。

ただ、ヒトミには泣くことしかできなかった。

7話　涙（後書き）

感想お待ちしております～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2769r/

人嫌いですから

2011年10月9日10時49分発行